明日への道標

吾が言は即ち万人の声
―斉藤隆夫 不滅の反軍演説―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

帝国議会の衆議院本会議における熱烈な弁舌で議場は騒然となった。軍部の暴走による日中戦争の政治責任を斎藤隆夫（1870－1949）は怯むことなく徹底して追及した。暗夜の雷鳴のように轟く鋭い舌鋒は軍部におもねる政治家たちを震撼させる歴史的な反軍演説として語り継がれる。

約１時間半に及ぶ熱弁のうち軍部批判にあたる３分の２ほどが議事録から削除された。報復弾圧はそれだけにとどまらず陸軍省の幹部や将校から聖戦を侮辱し、英霊を冒涜し、民族精神を否認しているとして懲罰動議が提出される。斎藤が所属する立憲民政党はもとより圧倒的多数の賛成投票で衆議院議員の除名が採択された。

軍部が斎藤の政治生命は終わったと安堵したとき予期せぬ事態によって歴史は急転回する。

一直線に進むネズミの殿様

斎藤は現在の兵庫県豊岡市の農家で兄と４人の姉の末っ子として生まれた。山に囲まれて耕作地は少なく貧しい暮らしだった。少年の頃から向学心に燃え、京都で学ぼうと家出したこともある。20歳を迎えて上京を決意し、20日間ほど歩いてようやく東京にたどり着く。

同郷の大物実業家である原六郎らの援助で東京専門学校（早稲田大学）に入学し、ひたすら勉学に励んだ。首席で同校行政科を卒業し、１年後に難関の弁護士登用試験に合格する。

それでも斎藤は満足しなかった。30歳を過ぎてアメリカのエール大学法科大学院に留学し、憲法や政治学の研究に没頭する。無理がたたって肋膜炎を患い、３回にわたる手術で２年間の留学生活のうち約１年は孤独な入院生活を余儀なくされた。

斎藤隆夫

帰国後、天下国家のための仕事をしたいと願い、政治家への転身を模索する。41歳になった1912年、原の支援で地元・兵庫から念願の衆議院選挙に打って出た。人力車に乗って各地を跳びまわり、なんとか最下位で初当選する。

身長150㎝ほどの小男で風采の上がらない斎藤はのちにネズミの殿様というあだ名で親しまれた。肋膜炎の手術で肋骨を７本も失い、身体がいつも右後方によじれていた。演説に際しても首を少し右に傾け、小刻みに揺らしながら話す癖があった。

もともと雄弁家ではない斎藤は当初、演説下手で通っていた。しかし「事を行うにあたっては、正しき道を追って一直線に進むべし」という不屈の信念を抱いていた。いかなる者も憲法に従って主権者である国民の期待に応えなければならないという立憲主義の立場から論陣を張り、たびたび軍部の強引な政治介入を批判する。斎藤の怒りは軍部だけでなく軍部に追従する気骨のない政治家にも向けられていた。「己の立脚地を定めずして、他人の後を追って走るがごときは独立人にあらずして一種の奴隷である」と痛烈に皮肉った。

鎌倉の海岸で声を嗄らす

陸軍の青年将校が率いるクーデターが1936年２月26日に発生した。いわゆる2.26事件のあと帝国議会における斎藤の質問演説が粛軍演説として広く話題を呼ぶ。斎藤は青年将校による短絡的な軍事行動をきびしく戒める一方で軍部全体の政治介入に釘をさす。「武力で自己の主張を貫こうとするのは立憲政治の破滅は言うに及ばず国家動乱、武人専制の端を開くものであるから、軍人の政治運動は断じて厳禁せねばならない」と訴えた。

翌日の新聞各紙は１面で粛軍演説を取り上げ、斎藤は勇気ある政治家として一躍脚光を浴びる。とはいえ警察や軍部に監視され、右翼から脅迫状が届くようになった。これに対抗するように同年『軍部に告ぐ―二・二六事件―』を出版する。

時代の歯車は斎藤の願いも虚しく真逆の方向へ動いていく。1937年、盧溝橋事件によって日中戦争が勃発し、第２次世界大戦の導火線となった。斎藤は浜田国松・加藤勘十との共著『議会主義か・ファッショか』でファシズムの脅威に対峙する。

議会の承認なしで国民を戦時体制に動員する国家総動員法案が1938年、衆議院に提出された。斎藤は「この法案はあまりに政党をなめている。僕は自由主義最後の防衛のために一戦するつもりだ」と同僚議員に語り、法案成立に徹底抗戦した。だが各政党は孤軍奮闘する斎藤の主張を無視し、議会政治を否定する悪法を全会一致で可決する。

法案成立後、国会論戦による過労で転倒・打撲した斎藤は脳梗塞の疑いで病床に臥す。ところが斎藤の支持者たちはそのまま彼を放っておかなかった。日中戦争の泥沼化に連れて「なぜ沈黙しているのか」という手紙が日増しに届くようになり、斎藤は２年ぶりの登壇を決意する。

70歳を過ぎて体力も落ち、病気療養中の身でありながら演説原稿を起草し、何度も練り直した。演説の練習は鎌倉の海岸で行うのが慣例となっていた。練習だからといって斎藤は手を抜かない。それでよく声を嗄（か）らしていた。心配した妻の乙女が手製のキャラメルを持たせたところ声を嗄らすことなく話せるようになった。最終的には全文を暗記し、原稿を見ずに演説する練習を繰り返した。

燃えつきる蝋燭であれ

1940年、米内内閣が成立し、第75議会が召集された。衆議院本会議でひさしぶりに斎藤が登場すると聴きつけて傍聴席はすぐに埋めつくされた。ついに登壇した斎藤は「100万、200万の将兵諸士をはじめとして国民が払った生命、自由、財産その他一切の犠牲はいかなる人の口舌をもってしても万分の一も尽くすことはできない。しかるに国民に向かって緊張せよ、忍耐せよと迫る。国民は緊張するに相違ない。忍耐するに相違ない。しかしながら国民に犠牲を要求するばかりが政府の能事ではない」と満腔の怒りを込めて糾弾する。そして「強者が弱者を征服する、これが戦争である。この現実を無視して唯いたずらに聖戦の美名に隠れて国民的犠牲を閑却し、曰く国際正義、曰く道義外交、曰く共存共栄、曰く世界の平和、かくのごとき雲を掴むような文字を並べ立てて千載一遇の機会を逸し、国家百年の大計を誤るようなことがあれば現在の政治家は死してもその罪を滅ぼすことはできない」と戦争の本質を喝破した。

議場には拍手と「やめろ、やめろ」などの怒号が飛び交った。議員除名の投票では賛成296人、空票144人、欠席23人で反対は芦田均ら７人にとどまった。その後、超党派の聖戦貫徹議員連盟が発足し、大政翼賛会に合流する。斎藤は第七十五帝国議会去感と題した漢詩で「吾言即是万人声」（吾が言は即ち是れ万人の声）と書き記した。

1942年の総選挙では非推薦で兵庫５区から立候補する。軍部などの選挙妨害に抗して約２万票を獲得し、２位と7000票以上の大差でトップ当選を果たす。戦後の1946年、反軍活動で公職追放を免れた斎藤は第1次吉田内閣の国務大臣として初入閣し、翌年の片山内閣でも行政調査部総裁に就任する。２年後に心臓病と肋膜炎を併発し、79歳で信念に徹した生涯の幕を閉じた。

言論を武器に言論を守る戦いに一生を捧げた斎藤は「一本の蠟燭（ろうそく）たれ」と後世に伝えている。蝋燭はみずから燃えつきて人々に光をもたらした。